



2

特別寄稿：「臨牀消化器内科」40 年を振り返る 「臨牀消化器内科」の休刊を惜しむ —愛読者・査読者としての関わり

多田 正大*

はじめに

私は 57 年間にわたって消化器科医として頑張ってきました。とくに内視鏡を駆使した診療に励んできましたが、人間、80 歳を超えると体力的に衰えを感じるようになり、胃カメラや大腸ファイバーが重く感じるようになりました。そろそろ引退する時期と悟り、クリニックを廃業する知らせを皆様にご通知しました。私を育てていただいた日本メディカルセンター 増永和也代表から丁寧な労いの書簡を頂戴しました。そのなかで「臨牀消化器内科」は 40 周年記念号をもって休刊すると知らされました。人間も定期出版物も潮時があることは承知していますが、偶然、私の廃業に時期が一致したことになります。愛読した雑誌の休刊の知らせに辛い気持ちにさせられましたが、惜しまれながら幕引きすることは「華」ではないでしょうか。

私は喜寿を過ぎた頃から、論文執筆や講演会出張は一切お断りしてきましたが、敬愛する「臨牀消化器内科」の終焉に当たって、一言、昔話を披露しなければ……

I 増永和也氏にまつわる思い出

日本メディカルセンターを率いる増永氏には親しくお付き合いさせていただきました。ご自身が「臨牀消化器内科」を担当し、奥様が「臨牀透析」を企画され、ご夫婦で会社を経営なさっていました。夫婦仲が評判で、京都で学会があると一緒に古寺仏閣を散策したそうです。増永氏は大の写真好きで、高価なニコンの最新デジカメを駆使して、素晴らしい写真を撮影していました。京都・法金剛院の蓮の花(京都市の中心からやや離れた寺、京都人でも蓮の花が咲く午前中に行くことはまれ…)を撮影し、A3 版に引き伸ばして私のクリニックに寄贈していただいたこともありました。

私にも医学書を出版する機会を与えていただきましたが、一番印象に残る書籍は「潰瘍性大腸炎とクローン病」(1999 年)でした。当時、炎症性腸疾患が増加していたものの、患者向けのテキスト、広報誌は皆無でした。医師向けでなく、患者と家族向けの解説書を出版する機会を与えていただいたのがこの書籍でした。

この書籍の宣伝のために、代表の独断で朝日新聞の朝刊第 1 面に宣伝広告を掲載していただきました。費用は内緒にしますが、かなり高額であったと伺っています。この宣伝文を読み、購読した患者と家族から「治療の羅針盤になった」との礼状がたくさん会社に届いたそうです。

*多田消化器クリニック

(〒604-8136 京都市中京区三条通烏丸東入梅忠町 24)

2万部印刷したのが1年余で完売し、一部を修正して2刷、3刷と増刷・改訂する人気本になりました。増永氏は採算を度外視して、社会貢献のためとして繰り返し新聞広告を続けてくださいました。太っ腹に感謝しています。

II 編集室にまつわる思い出

私が若輩であったころ、医学論文は学会誌に掲載されるよりも、医学書院の「胃と腸」(当時、月刊1万部印刷)に採用されることが名誉であるとされていました。そして私自身が「胃と腸」の出版と深く関わるようになった頃、「臨床消化器内科」が出版されることになったことを編集委員会で知りました。「胃と腸」の人気にどこまで迫れるか、興味津々でした。「胃と腸」は消化管を中心としたテーマを取り上げることを基本として、「臨床消化器内科」は肝臓や脾臓など幅広く消化器全般を網羅することで住み分けができていたようです。

「胃と腸」の欠点は執筆者が多忙で原稿締め切り日を守らず、しばしば発行日が遅れることがありました。本来なら原稿は編集責任者が査読して、修正箇所を指摘し、討論してから出版することが建前ですが、当時は発行日に間に合わず査読をスルーして出版されることがよくありました。出版された原稿を読むと可笑しい文章が露呈することもしばしばありました。

私が「臨床消化器内科」から依頼されワープロ印刷した原稿を送ると、後日、編集室から著者校正のゲラが送り返されてきました。私の原稿の上に赤ペンで編集部の文章チェックが入られていました。紙面が真っ赤に修正されていました。しかしその文章を読むと立派な日本語に修正されており脱帽させられました。増永氏に聞くと、編集室には国文科卒業の才媛エディターがいるそうで、文章に厳しい人とのことでした。以降、編集室に頼って、私の原稿に手抜きが生じるようになりましたが、美しい日本語

になり助けられた記憶があります。編集室の一人K氏は温泉博士といわれる才媛で、全国各地の温泉に精通しており、のちに私の温泉のお師匠さんになった方でした。

III 連載「内視鏡の読み方」査読にまつわる思い出

「臨床消化器内科」の原稿は非常に教訓的な内容が記述されており、学会に出不精な開業医にとっても刺激的で、最先端の情報が得られ役立ちました。とくに「内視鏡の読み方」の連載は臨床医にとって啓蒙される論文が掲載されていました。しかし時折、この表現は可笑しいのではないか、疑問符がつく文章に気づくこともありました。せっかくの学術誌に傷がつく……と感じることがあり、親しい増永氏に文句をつけた経緯がありました。

それなら「内視鏡の読み方」の査読者として私に機会を与えるので、「執筆者とやりとりしなさい」と議論の場を設けていただいた経緯がありました。論文査読すること…雑誌が刊行される前に最新の論文を読めることで、やりがいのある仕事を与えていただきました。2013年5月号から始まり、なんと10年間も査読に携わらせていただきました。論文執筆者にも変遷があり、この先生は今この病院で勤務している、こんな仕事をしている、名前も知らなかった若い先生が堂々と自己主張している、頼もしくもあり、自らの老いを感じる10年間でした。最後に一言、読者にとって引用文献は貴重で参考になる記録です。執筆者自らの業績を列挙するだけでなく、広く世界中の優れた先駆的論文を引用していただきたいと希望しています。

IV 編集委員・丹羽寛文先生にまつわる思い出

元 日本消化器内視鏡学会理事長 丹羽寛文先

生は「臨牀消化器内科」の創刊当時の編集委員の一人でした。丹羽先生が東京大学第一内科に在籍されていた折、第29回日本消化器内視鏡学会総会(1985年5月)が東京虎ノ門・国立教育会館で開催されました。当時、京都第一赤十字病院で勤務していた私にパネルディスカッション「潰瘍性大腸炎の長期経過」の司会をせよ、との電話をいただいたことを今でも鮮明に記憶しています。雲の上の存在からの直々の通達で頭の中が白くなり体が震えました。それまで学会のシンポジスト、パネリストとして数多く参加してきましたが、司会者に選ばれたのはこれが最初でした。丹羽先生に私の仕事を認めていただけたこと、今でも恩義に感じています。

「臨牀消化器内科」第2巻2号(1987年)で潰瘍性大腸炎の特集が企画された折、私に「潰瘍性大腸炎の鑑別診断」の執筆機会が与えられました。編集委員の丹羽先生のご配慮に報いるために、手持ちの炎症性腸疾患のベストのX線・内視鏡画像を提供して企画に参加させていただきました。懐かしい思い出となりました。

丹羽先生は全国の温泉を巡るのが趣味で、自分の温泉自慢を憚らず語る方でした。丹羽先生曰く「京都に古刹はたくさんあっても良い温泉がない」、辛口なコメントでした。自らの趣味で町の評価をする大先生でしたが、私も京都人として地元を擁護しなければいけません。奈良には光明皇后が貧民のために設置した法華滅罪之寺^{ほっけめつざいのてら}の蒸風呂があり、京都八瀬にも釜風呂がある、温泉の歴史では負けていないと主張しました。

京都宝ヶ池にある国立京都国際会館で日本消化器内視鏡学会が開催された折、ホテルに宿泊する丹羽先生を「八瀬村」に接待しました。丹羽先生は歴史ある蒸風呂、素朴な田舎飯が気に入ったようで、私を温泉仲間の一人に加えていただき、これが私の温泉事始めになりました。

丹羽先生はF社のR氏と共に全国温泉行脚をなさっていたそうですが、「この温泉が良い、ぜひとも行きなさい」とお勧めの電話、手紙がし

ばしばありました。「温泉へ行くと有名旅館の湯より、地元の公衆浴場に行きなさい、なぜなら地元の人の湯であり衛生管理も行き届いていて、湯質が良い…」、湯質にこだわる先達からのアドバイスでした。学会の最高位の先生と温泉談義をするためには、私もそれなりに温泉学を勉強しなければいけません。編集室K氏からアドバイスもいただきながら、診療の傍ら、温泉学を猛勉強しました。丹羽先生が行っていない温泉を目指して、日本最北端の稚内温泉、最東端の知床・相泊温泉、最南端と最西端は西表島温泉、極寒の氷結した湖上に設営した湯船(北海道・然別温泉)などなど、日本中の温泉を駆け巡りました。

土曜日の午前中の診療が終了した後、車、新幹線や飛行機などを乗り継いで、全国各地の湯を目指しました。温泉入浴のみが目的の旅で、名所旧跡の観光には一切目もくれず、ひたすら良い湯を求める慌ただしい温泉行脚を続けてきました。1,000湯入湯を目標、次は1,500湯、2,000湯を目指した結果、現在は2,423湯に至りました。

おわりに

私の温泉行脚、そして「臨牀消化器内科」から教わったことを最後に述べます。温泉の医学的効果だけでなく、人を温かくもてなす精神、すなわち温泉文化が温泉宿を存続できる基本であると悟りました。

医療でも診断技術が高いことは当然ですが、患者にわかりやすい言葉で、情熱をもって説明する必要があることを教えられました。

Fare-well, My Rinsho Shokaki Naika

Masahiro Tada*

*Tada Gastroenterological Clinic, Sanjo-Karasuma St. Umetada-cho 24, Nakagyo-ku, Kyoto-shi, Kyoto 604-8136, Japan